

【卒業生 学術活動報告】

視能訓練士学科 1 年制 10 期生 柳沢亜紀さん

学会 口述発表

演題： 流行性角結膜炎後の視力低下評価にマイヤーリング像が有用であった 1 例

発表年月日： 2021 年 11 月 20 日

学会名： 第 62 回 日本視能矯正学会

抄録・概要

【目的】角膜混濁の程度は視力に影響を与える。今回、流行性角結膜炎（以下 EKC）後の多発性角膜上皮
下混濁（以下 MSI）による混濁が軽減したにもかかわらず、視力低下が持続した症例において、オートレ
フケラトメータのマイヤーリング像と前眼部 OCT での観察が有用であった症例を報告する。

【症例】初診時 6 歳女児。2 年前に EKC に罹患後、両眼の視力低下、羞明が持続し、複数の眼科で加療さ
れるも再燃を繰り返し、当院を受診した。初診時視力、右 (0.1)、左 (0.4)、両眼角膜に MSI を認めた。
眼位はカバーテストで正位、Titmus Stereo Tests（以下 TST）は 3000" であった。低力価ステロイド
点眼にて、浸潤による混濁は軽減するも、右眼は症状と視力は改善を見なかった。しかし、マイヤーリン
グ像および前眼部 OCT にて角膜前面の不整を認めた。タクロリムス点眼を追加したところ、徐々に不
整像の改善が得られ、治療開始 1 年 9 カ月後に右眼 (1.2)、左眼 (1.0) を得て、T S T も 50" に改善と
なった。

【結論】EKC 後の MSI において、角膜混濁に比して視力が改善しない例では、角膜前面形状評価も重要で
あり、マイヤーリング像や前眼部 OCT が有用と考えられた。タクロリムス点眼が、不整な角膜前面の改
善に有効であった。